『思い思いの若者たち』

＜若者支援への国の本気度を問う＞(2)

事務局長　布袋　太三

前号では国の若者支援の本気度に少々疑念ありと言わせてもらいました。

本当に本気になって若者の窮状を助けたいと思うなら、政府はまずは支援をめぐる現状をつぶさに調査することから始めるべきですが、どうもその気配が伝わってきません。

例えば地域の善意を集めつつ地味な支援を続けている NPO や、関連する機関の橋渡しや工夫でさまざまな支援活動を支えようとしている自治体は全国的に相当数ありますが、なぜ国はそうした人々とよく話合い、協働していくことを模索しないのでしょうか。

そこでは学者たちの机上の推論を越えた生きてきたノウハウと実相が聴けるはずなのに、そして、それは今本当に必要な若者支援施策に辿りつく最も有効なスタート地点になるに違いないのになかなかやろうとはしないのです。

そもそも国は、これまで地方に散在する若者支援の NPO 活動などは歯牙にもかけない態度を続けてきました。そういえばかつて若者サポートステーションを私たちが受諾した際に視察に訪れた厚労省のキャリヤと思しき若い係官の態度には私自身実に辟易させられたことを思い出します。何というか一緒に知恵出し合いましょうなどという姿勢がみじんも感じられない見え見えの「上から目線」でした。最近少しは改善されているかもしれませんが、それでも地方に学ぶとか、何かポジなアイデアを提示して共に検討に入るとかはやはりほとんどないように思われます。

そこで今更ですが、国の本気度アップのためにはまずは地方の支援者の苦労話を謙虚にていねいに聴き取ることから始めてはどうでしょうか。そして、その上でそれぞれの地域事情をふまえた弾力性のある支援指針を提示していくべきではないかと思います。

また、その際、困難を抱えた若者たちの社会参加を阻む「構造的要因」を解明し、かつ「その除去」や「再チャレンジのための具体的工程づくり」も添えて提示されればさらに実践的なものになると思います。

どうにも人馴れしにくいコミュニケーションの苦手な人は確かにどこにでもいます。たとえそうした傾向の人であっても、社会の一員として何らかの存在感ある役割が担える仕組みを私たちの社会は絶えず準備していくべきではないでしょうか。

そして、もっと寛容で穏やかな鎖の輪が社会隅々に行き渡っていくならば、生きづらさを抱える若者の数は必ずや減少に転じるに違いありません。

田辺市子どもの学習支援事業

平成 28 年から生活困窮者自立促進支援事業の一環で田辺市から委託を受けています。
学習支援は、貧困の連鎖を防止する取り組みとして小学校から高校生のひとり親家庭等を対象に無料の塾を開設しています。
また、通信制高校に通う生徒の学び直しや高校中途退学者の防止など学習面だけではなく学校・家庭以外の第三の居場所として地域の大人が関わって行けたらと思っています。

■談儀善弘先生
高校生数学
金曜日
午後 2 時～ 3 時半

■濱野広二先生
高校生英語
水曜日
午後 2 時～ 3 時半

■岩本元博先生
中学生数学
金曜日
夜 7 時～ 8 時半

■山本泰代先生
中学生英語
月曜日
夜 7 時～ 8 時半

■藤五和久先生
小学生
火曜日
午後 4 時～ 5 時半